Japanese Association of Educational Psychology

教育心理学研究, 2000, 48, 267—274

女子青年における痩身願望についての研究

馬 場 安 希[1]　菅 原 健 介[2]

本論文では現代女性の痩身化の実態に注目し，痩身願望を「自己の体重を減少させたり，体型をスリム化しようとする欲求であり，絶食，薬物，エステなど様々なダイエット行動を動機づける心理的要因」と定義した。痩身は「幸福獲得の手段」として位置づけられているとする立場から，痩身願望の強さを測定する尺度を構成するとともに，痩身願望が体型への損得意識を媒介に規定されるモデルを検討した。青年期女子に質問紙による調査を行い，痩身願望尺度の一次元構造を確かめ，ダイエット行動や摂食行動との関連について検討し，尺度の信頼性，妥当性が確認された。また，体型への損得意識に影響を及ぼすと考えられる個人特性と，痩身願望との関連性を検討した結果，「賞賛獲得欲求」「女性役割受容」「自尊感情」「ストレス感」などに関連があることが示された。そこで，これらの関連を検討したところ，痩せれば今より良いことがあるという「痩身のメリット感」が痩身願望に直接影響し，それ以外の変数はこのメリット感を媒介して痩身願望に影響することが明らかになり，痩身願望は3つのルートによって高められると考えられた。第1は，肥満から痩身願望に直接至るルートである。第2は，自己顕示欲求から生じる痩身願望で，賞賛獲得欲求と女性役割受容が痩身によるメリット感を経由して痩身願望と関連しており，痩身が顕示性を満足させるための手段となっていることが示唆された。第3は，自己不全感から発するルートである。自尊感情の低さと空虚感があいまったとき，そうした不全感の原因を体型に帰属し，今の体型のせいで幸せになれないといった「現体型のデメリット感」を生じ，さらにメリット感を経由して痩身願望に至ることが示された。これらの結果から，痩身願望が「女性的魅力のアピール」や「自己不全感からの脱却」を目的として高まるのではないかと考えられた。

キーワード：痩身願望，体型に対する損得感情，顕示欲求，自己不全感，摂食障害

問　　題

わが国の女子青年に関して，BMI（体格指数：体重／身長^2）をみると，ここ30年間，平均身長が伸びているにもかかわらず，平均体重は増加していない。結果的にBMIの平均値は低下し続け，最近では医学的に「痩せ気味」と評価される20.0に近づきつつあるという（切池・永田・白田, 1996）。若い女性が年々痩せてゆく理由のひとつとしてダイエット行動の習慣化，定着化の影響が考えられる。実際，ダイエット食品，エステティックサロン，フィットネスクラブ，痩身用運動器具，痩せる衣服や下着など様々なダイエット関連商品は若い女性に広く浸透しており，女性雑誌にもこれらの広告や記事が多数掲載されている（諸橋, 1994）。また，大学生を対象とした調査でも，男子学生に比べ女子学生は，「ダイエット経験率」や「痩せたいという意識」が高く，ダイエットの目的として「体型の維持」よりも「よりスリムになること」を重視しており，痩身への顕著なこだわりが示されている（菅原・馬場, 1998）。

現代の女子青年たちはなぜ痩せたいと願い，ダイエットに励むのだろうか。こうした問題は，精神医学，マスコミ学，女性学など広範な領域と関わる重要なテーマであるものの，その心理学的メカニズムを実証的に検討した研究は極めて少ない。痩せるための手段は食事制限，薬物，運動，エステなど様々であるが，いずれも，いわゆる「痩身願望」によって動機づけられた行動と考えることができる。そこで，本研究では，痩身願望を「自己の体重を減少させたり，体型をスリム化しようとする欲求で，食事制限，薬物，エステなど様々な痩身行動を動機付ける心理的要因」と定義した上で，これを測定する尺度を作成し，女子青年の痩身願望を支えている心理的メカニズムについて検討してみることにする。

痩身願望の背景として，多くの研究者がまず第1に指摘するのは社会文化的な要因である。「痩せた女性が美しい」とする現代の美意識は，アメリカにおいて1960

1　国立精神神経センター・精神保健研究所・社会復帰相談部
〒272-0827 市川市国府台1-7-3
2　聖心女子大学　〒150-8938 東京都渋谷区広尾4-3-1
sugawara@u-sacred-heart.ac.jp

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

年代頃から急激に広まったとされるが（Garner & Garfinkel, 1980），その後，欧米人の体型や顔を理想とする日本人にもその規範が浸透し（諸橋, 1994），現在ではすでに“強迫的な基準”にまで達しているという（秋本・諸橋, 1987）。日本の女性向け雑誌はかなりの割合がダイエット行動に関する記事や広告で占められているが，その中でダイエット体験談としてのサクセスストーリー（恋人が出来た，人からやさしくされるようになった）なども頻繁に紹介されている（諸橋, 1994）。こうした報道や広告などを通じて，痩せていなければ幸せになれない，痩せれば幸せになれるという身体観が女性たちに繰り返し植え付けられてきたと考えることができる（矢崎, 1992）。つまり，現代の若い女性たちにおいて，「身体」は幸福獲得のための重要な「手段」として認識されており，コントロールの対象として関心を向けられていると言える。

このような社会的背景から考えると，個々人の痩身願望の強さは，まず第1に，自己の身体を今よりスリム化することが，自己の幸福にとってどの程度有効であると考えるかによって規定されると見ることができる。すなわち，痩せることによって期待できるメリットをより多く見積もるほど，あるいは，現在の体型のままでいることによるデメリットをより多く見積もるほど，その個人の痩身願望は高くなると予測できる（仮説1）。

では，上記のメリット感やデメリット感は何によって規定されるのだろうか。本研究では2つの要因を指摘したい。1つは個人の実際の肥満度である。スリムな身体と幸福とが結び付いている社会的背景において，現在の体型が肥満しているほどデメリット感が高く，また，痩せた場合のメリット感も高くなるはずである。つまり，BMIの値が高い者ほど，痩身のメリット感や現体型のデメリット感が高いと予測できる（仮説2）。

メリット感，デメリット感に影響を与えるもう1つの側面は目標の明確さである。痩身によって身辺に何らかの変化が生じると予期していても，それを望ましいことと感じなければ痩せる意味も無い。従って，痩せることによって達成しようとする目標を明確に持つ者ほど，痩身のメリット感や現体型のデメリット感も高くなると考えられる。痩身願望に関連する従来の研究からは，こうした目標の具体的な候補として以下の4つの点を挙げることができる。

1）社会的評価の維持，高揚：一般に，スリムな体型は「美しさ」や「かわいらしさ」の印象と結びついており（馬場・菅原, 1999），他者に与える自己のイメージや社会的評価を操作するための重要な要因となりうる（鍋田ら, 1988）。従って，自己の対人的，社会的側面へのこだわりの高さである公的自己意識，他者からの否定的評価を回避しようとする拒否回避欲求，他者からより高い評価を得ようとする賞賛獲得欲求がそれぞれ高い個人は，体型を自己呈示の手段として意味付け，メリット感やデメリット感を抱きやすいと予測できる（仮説3-1）。

2）自尊感情の回復，高揚：馬場・遠山（1991）は，現代女性の痩身行動について，流行に合った（スリムな）体型になることで望ましくない自己像を補償し，自尊感情を高めようとすると指摘している。このように，自己への評価と体型が密接に関連づけられているとすれば，自己に対する不全感や日常生活において漠然とした不安感，空虚感を持つ個人ほど，その原因としての現体型にデメリット感を強め，また，自己評価を回復させるための手段として痩身へのメリット感を高めるはずである（仮説3-2）。

3）女性らしさの確立：痩せた身体を美しいとする意識は基本的に女性にのみ当てはまり，伝統的な性役割規範の重要な要素の1つになっているとされる（柏木, 1972）。従って，一般に伝統的な女性役割を受容している者ほど，社会的期待に自己を合致させ，女性としてのアイデンティティーを保持するための一手段として，メリット感やデメリット感を持ちやすいと考えることができる（仮説3-3）。

4）成熟拒否：痩せたい願望の病である摂食障害の病因に関して，精神分析的な解釈では，「女性である肉体を持っていることに対するどうすることもできぬ嫌悪，絶望（下坂, 1988）」や「女らしさの形成をめぐる葛藤（馬場・村山, 1987）」があるとされ，肥満への恐怖は女性らしい丸みを帯びた体型，つまり自分が女性として成熟することへの拒否反応の表われであると考えられている。もし，成熟への拒否感情を痩身によって表現しようとしているのなら，そうした感情が高い者ほど，痩身のメリット感を強く意識しやすいと考えられる（仮説3-4）。

尚，この仮説は痩身を女性らしさの獲得手段とする仮説3－3と部分的に矛盾するものである。しかし，成熟拒否説は痩身に関連する研究分野で広く知られていることから，本研究ではあえてこの仮説も検討の対象とすることにした。

以上のように，本研究では，現代の若い女性において痩身が「幸福獲得の手段」として位置づけられているとする立場から，痩身願望が体型へのメリット感，デメリット感を媒介に，幾つかの個人特性によって規

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

定されているというモデルを想定し，痩身に関連する諸要因間の関連性を検討するものである。

方　法

調査対象：本研究は自己記入式の質問紙調査によって行われた。対象者は回答に不備のあった者を除く500名の女子大学生・女子短期大学生で，平均年齢19.64歳(標準偏差0.59)であった。いずれも心理学関連の授業の後，記入を求めその場にて回収した。**調査項目**：調査票に含まれる質問項目は以下の通りである。尚，本調査対象者のBMIは，痩せ（BMI20未満）が60.4%，標準(20以上24未満）が36.8%，肥満（24以上）が，2.8%であった。**痩身願望尺度**；本研究は，痩身願望を「自己の体重を減少させたり，体型をスリム化しようとする欲求であり，食事制限，薬物，エステなど様々なダイエット行動を動機付ける心理的要因」と定義し，従来の食行動や摂食障害の尺度などを参考に，体重や痩せることへのこだわりの表現を収集した。これらを整理改変しながら痩身願望尺度として11項目作成した。その際，ダイエット方法や食行動の特徴，あるいは痩せたい理由など具体的な内容には言及せず，あくまで痩せたいという意識の強さのみを測定できるよう配慮した。**体型に関するメリット感，デメリット感**；痩身のメリット感や現体型のデメリット感についての項目を作成した。そのため，まず89名の女子学生を対象に予備調査を行い，「もし今より痩せられたら…」や「今の体型のせいで…」という2つの文章を完成させる方法で自由記述を集め，内容を整理抽象化して痩身のメリット感を尋ねる4項目と現体型のデメリット感を尋ねる4項目を決定した。具体的な項目は，「今の体型のせいで幸せになれない」，「今の体型のせいで人に注目されない」，「今の体型のせいで性格が暗い」，「今の体型のせいで生き生きしていない」（以上，現体型のデメリット感），「今より痩せられたら自分に自信が持てる」，「今より痩せられたら性格が明るくなる」，「今より痩せられたら何かいいことがある」，「今より痩せられたら人前で堂々と振る舞える」（以上，痩身のメリット感）であった。**ダイエット経験**；具体的なダイエットの方法について主な10種類の行動を選び，その経験頻度について「なし」「1，2回」「何度か」「常に」の4件法で尋ねた。**身長・体重**；BMIを算出するために尋ねた。**食行動尺度**；痩身願望尺度の妥当性を検討するために，DEBQ質問紙（今田，1993）から，抑制的摂食（13項目）と情動的摂食（9項目）を用いた。**公的自意識・私的自意識**；Fenigstein, Scheier & Buss（1975）による尺度を基に菅原（1984）が作成した日本版自意識尺度を用いた。自己の外的側面への関心度である公的自意識（5項目）と内的側面への関心度である私的自意識（5項目）の2つの下位尺度から構成されている。**賞賛獲得欲求・拒否回避欲求**；承認欲求の程度を測定するため，菅原(1986)による賞賛獲得欲求（5項目），拒否回避欲求（4項目）の尺度を用いた。本尺度は他者から肯定的な評価を引き出そうとする傾向(賞賛獲得欲求)と他者の否定的な評価を回避しようとする傾向(拒否回避欲求)を測定することができる。**性役割の受容**；伊藤（1978）によって作成されたM-H-F尺度を用いて，各項目に対する「個人的評価」，つまり自分にとってどの程度重要かについて尋ね，Masculinity, Humanity, Femininity（各10項目ずつ)をそれぞれの役割の受容度として得点化した。**自尊感情**；Rosenberg（1965）によって作成された10項目。今回は山本ら（1982）による日本語版を用いた。**日常感情尺度**；山本ら（1997）による日常生活の気分や感情を尋ねる尺度を一部改変して用いた。生活のストレス感(8項目)・リラックス感（3項目)・空虚感（12項目)・充実感(7項目)の4つの下位尺度より構成されている。**成熟拒否**；EDI（Welch, Hall&Walkey, 1988：志村ら，1994）のMaturity Fear因子を参考に一部改変して作成した。項目内容は，「子供のままでいたほうが幸せだ」「戻れるなら子供の頃に戻りたい」「人生で一番幸福なときは子供の頃だ」「大人になりたくないと思っている」「いつまでも子供でいたい」の5項目であった。

尚，上記のうち，ダイエット経験と身長，体重を除く項目は，すべて，“非常に当てはまる”から“まったく当てはまらない”までの5件法で回答を求めた。

結　果

痩身願望尺度の構造

痩身願望に関する11項目の構造を検討するため主成分分析を行った(TABLE 1)。その結果，第1主成分の寄与率は63.62%と高く，第2主成分以下の寄与率(第2主成分は8.0%)を大きく上回っており，強い1次元構造が認められた。また，第1主成分に対する各項目の負荷量はすべて0.70以上と高いことから，これら11項目を痩身願望尺度の尺度項目として採用し，合成得点を算出して以下の分析に使用した。尚，尺度のα係数は0.94と高い値を示している。

痩身願望尺度の妥当性

本研究において痩身願望は，個人に摂食やその他のダイエット関連行動を促す動機的要因として概念化された。従って，本痩身願望尺度が妥当なものであるな

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

TABLE 1 痩身願望尺度の主成分分析結果

項目	負荷量
1. 体重が増えるのが怖い	.73
2. もっと痩せたいという思いで頭がいっぱいだ	.89
3. 体重にとらわれている	.81
4. 何が何でも体重を減らしたい	.89
5. もっと痩せていたらと悔やむことが多い	.84
6. 体力が落ちてもとにかく痩せたい	.70
7. 少しでも早く痩せたい	.88
8. 痩せられると聞けば何でもする	.73
9. 自分が痩せることを考えるとわくわくする	.79
10. 体重を量ったときに減っていると嬉しい	.72
11. 今，痩せることに一番興味がある	.78
固有値	7.00
寄与率	63.62

らば，高得点者ほどダイエット経験が豊富であり，様々なダイエット法を試し，また，日常的にも摂食量を抑えた食行動パターンを採用していると予測できる。そこで，痩身願望尺度と上記のダイエット行動，食行動の実態との関連性を分析し，尺度の構成概念妥当性を検討する。

まず，対象者を痩身願望得点の上位50%・下位50%を高得点群・低得点群としてグループ化し，これまでのダイエット経験との関連を検討した。すると，これまでにダイエット経験がある者の比率は低得点群で64.7%であるのに対して高得点群では94.6%と高く($p<.001$)，また，ダイエットを「常に心がけている」というダイエット習慣者も低得点群では3.6%であるのに対して高得点群では25.5%と大きな差が見られた($p<.001$)。

次に，ダイエット経験がある者（n=401）を対象に，痩身願望の高得点群と低得点群の間でダイエットの内容にどのような違いが見られるかを検討した（TABLE 2)。10種類の主なダイエット法に関して比較したところ，どの方法に関しても全般に高得点群の方が経験率は有意に高かったが，中でも「絶食」「痩せる薬」に顕著な差が認められた($p<.001$)。また，経験率そのものは大きくないが，「下剤，利尿剤」「タバコ」など過激な方法にも差が認められている($p<.001$)。一方，健康的なダイエット法とも考えられる「カロリー計算」「ダンベル，ジョギングなどの運動」の経験率は高得点群低得点群間で有意な差が認められなかった。

TABLE 2 痩身願望の得点群別，各ダイエット方法の経験比率

ダイエット方法	低得点群 n=194	高得点群 n=207	有意水準
絶食	47.9%	72.9%	***
カロリー計算	25.8%	33.8%	n.s.
特定食ダイエット	34.4%	46.8%	*
痩せるお茶	42.9%	53.4%	**
ダイエット食品	25.1%	38.6%	*
運動	63.9%	69.4%	n.s.
下剤・利尿剤	5.3%	16.2%	***
タバコ	2.6%	13.3%	***
嘔吐	3.7%	6.9%	n.s.
痩せる薬	10.6%	27.2%	***

***$p<.001$，**$p<.01$，*$p<.05$，†$p<.10$

最後に，食行動尺度（DEBQ）との関連を検討した。下位尺度である抑制的摂食尺度と情動的摂食尺度の痩身願望との相関は，抑制的摂食との間で.56，情動的摂食との間で.31と有意な相関が認められ（いずれも$p<.001$)，痩身願望が高い者ほど食事量を控えている傾向が認められた。

以上のように，痩身願望尺度得点の高いものほどダイエット経験が豊富であり，過激なダイエットにも挑み，また日常的にも摂食量を控えていた。こうした点から本痩身願望尺度の構成概念妥当性は概ね確認されたと考えられる。

体型に対するメリット感，デメリット感の構造

自己の体型に対する意識を尋ねた8項目について主因子法，バリマックス回転による因子分析を行ったところ，回転前の寄与率は第1因子54.7%，第2因子で19.6%，第3因子は7.2%であった。因子数を2～5まで変化させ回転後の負荷量を検討したが，いずれの場合も3因子以降に高く負荷する項目が見られないことから2因子構造が適切と判断し解釈を行った。その結果，「今より痩せられたら何かいいことがある」「今より痩せられたら自信が持てる」など痩身に対するメリット感と，「今の体型のせいで性格が暗い」「今の体型のせいで幸せになれない」など現在の体型に対するデメリット感とは異なる因子として抽出された。そこで，それぞれの合計得点を算出し，「痩身に対するメリット感」「現体型に対するデメリット感」の得点とし，以降の分析に使用した。尚，メリット感，デメリット感のα係数は順に.88，.87と十分に高い値を示し，尺度としての信頼性は確認された。

その他の心理的要因

その他，本研究で用いた既存の心理尺度について，主因子法，バリマックス回転による因子分析を行ったところ，いずれの尺度に関しても仮定された通りの構造が見出され，因子的な妥当性は再確認された。また，各尺度のα係数も.73～.89と信頼基準を満たす値を示していた（TABLE 3)。

痩身願望と他の心理的要因との関連

痩身願望を規定する心理的要因について考察するため，まず，痩身願望尺度と他の諸尺度，及びBMIとの

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

TABLE 3　各変数の α 係数，各変数と痩身願望との相関係数

変　数	α 係数	相関係数
メリット感	.88	.76***
デメリット感	.87	.45***
公的自意識	.87	.31***
私的自意識	.79	.12***
賞賛獲得欲求	.87	.31***
拒否回避欲求	.74	.25***
性役割の受容		
Masculinity	.82	.17***
Humanity	.80	.15***
Femininity	.73	.23***
自尊感情	.81	-.23***
日常感情尺度		
ストレス感	.89	.20***
リラックス感	.79	.03
空虚感	.92	.19***
充実感	.89	-.06
成熟拒否	.89	.18***
BMI	――	.41**

***p<.001，**p<.01

ピアソンの相関係数を算出し TABLE 3 に示した。

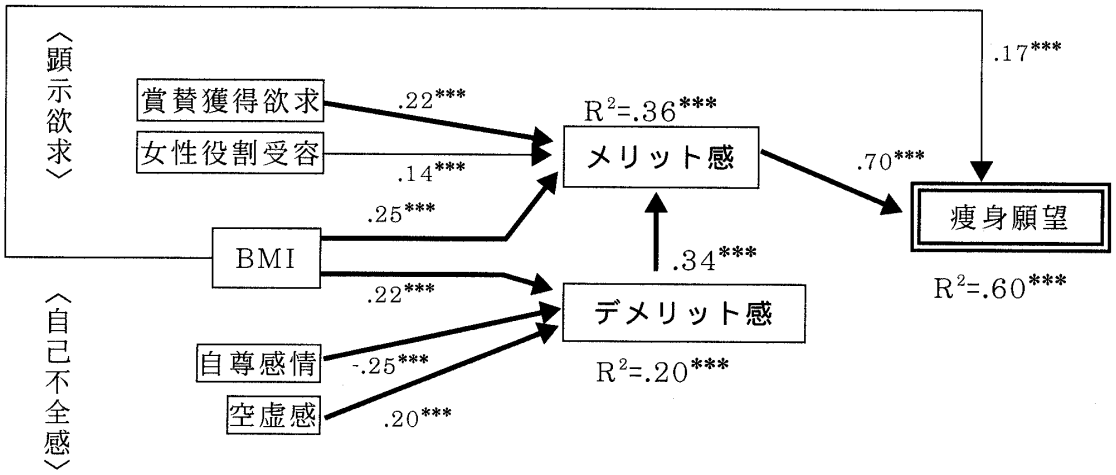
その結果，まず痩身のメリット感との相関が.76と高く，現体型のデメリット感や BMI との間にも.40程度の正の相関が認められた。その他，賞賛獲得欲求，拒否回避欲求，公的自意識など，対人的被評価意識に関わる尺度，あるいは，自尊感情やストレス感など自己の不適応感に関連する尺度との間にも弱い相関が認められている。

先にも延べた通り，本研究では痩身願望を高める心理的メカニズムとして次のようなモデルを仮定した。現代の若い女性たちにとって，痩身とは幸福を獲得するための重要な手段として位置づけられている。従って痩身願望のレベルは，まず痩身に対してどのような損得感を持つかによって変動するが，こうした意識はその個人の実際の体型や目的意識など，幾つかの個人特性によって規定されると考えられる。こうした仮定に基づき，痩身願望を最終的な説明変数としてパス解析を行った。

手順としてまず痩身願望を目的変数としたステップワイズ法による重回帰分析を行った。説明変数は仮説として想定された全変数である。尚，説明変数間の相関を算出したところ，最も高い値でも賞賛獲得と拒否回避の間の0.48であり，多重共線性の影響は小さいものと判断し，全変数を用いて分析することにした。

次に，メリット感を目的変数とした同様の重回帰分析を行った。この際，当初，メリット感と並列的な要因として想定されたデメリット感をもあえて説明変数に加えることとした。デメリット感は，痩身願望を目的変数とした回帰分析において痩身願望に直接的なパスを持たず，このままでは痩身願望のメカニズムの中にこの変数を位置づけることができなくなる。しかし，「今の体型のせいで損をしている」というデメリット感は，必然的な論理展開として，「だから痩せれば幸福になれる」というメリット感を導く要因になりうると考え，こうした分析を行うことにした。最後に，デメリット感を目的変数とした重回帰分析を行い，パス構造図を作成した（FIGURE 1）。

その結果，痩身願望のレベルは，痩身のメリット感によって直接規定されていることが示されたが，デメリット感との直接の関連は認められなかった。一方，社会的評価への関心や自己評価，女性性などの個人特性は，痩身願望と直接のパスは認められず，身体に対



***p<.001、**p<.01、*p<.05

FIGURE 1　痩身願望を規定する諸要因のパス図

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

するメリット感，デメリット感を通して間接的に痩身願望と関連していることが示された。すなわち，「他者に注目，喝采されたい」といった賞賛獲得欲求と，「かわいい，色気がある，優雅，従順」などのイメージを重視する女性役割受容(Femininity)の高さは「メリット感」の高さと関係していた。一方，「自分に自信がない」といった自尊感情の低さと，「むなしい，空っぽな」などの空虚感の高さは，「デメリット感」の高さに関係していることが示された。BMIはメリット感，デメリット感の双方にパスを持っているが，痩身願望への直接の影響も認められている。

考　　察

本論文では現代女性の痩身化の実態に注目し，痩身願望の強さを測定する尺度を構成するとともに，これを規定する心理的諸要因について検討を行った。

痩身願望尺度に関しては11項目からなる1次元性の強い尺度が作成され，信頼性，妥当性に関しても満足できる結果が得られた。また，痩身願望の強さは「カロリー計算」や「運動」といった健康的なダイエット行動には結びつかず，むしろ，「絶食」や「痩せる薬」など健康を害する恐れのある手法を促すことが示された。こうした点は，若い女性たちのダイエット行動が，しばしば健康上望ましくない影響を与える（北川, 1989：Pattonら, 1990など）という指摘を，動機的側面である痩身願望からも裏付けることが出来たと言える。

本研究では，痩身願望を直接高めるのは体型に対する損得意識であり，その他の個人特性は損得意識を媒介に痩身願望に影響すると仮定し，諸変数間の関連をパス解析によって検討した。その結果，「痩身のメリット感」が痩身願望と直接関連する重要な要因であることが示された。その他の変数については，BMIが直接間接に痩身願望に影響していたことを除くと，いずれも痩身のメリット感を媒介して痩身願望に関係するという構造が浮かび上がった。以上の点から，仮説1～仮説3-3までは概ね支持されたと考えられる。これに対して，しばしば摂食障害との関連から指摘される「成熟拒否」に関しては痩身願望やメリット感やデメリット感と極めて弱い相関しか得られず，パス構造図には位置づけることができなかった。この結果は摂食障害に関する成熟拒否説を直ちに否定するものではないが，少なくとも成熟拒否が一般女子学生の痩身願望を高める重要な要因であるとは言えないことを示している。従って，仮説3-4は支持されなかったことになる。

先に述べたように痩身願望を幸福獲得の手段として位置づけ，体型への損得意識がその規定要因になるというモデルを前提とした場合，上記の構造は次のように解釈すると理解しやすくなるのではないだろうか。すなわち，痩身願望は主に3つのルートを通じて高められると考えるわけである。第1は身体的な肥満から痩身願望へ直接至るルートである。これは心理的な要因を介していないことから，純粋に運動機能や健康上の理由から痩せたいと思う過程であると推測できる。第2のルートは自己顕示欲求から発する痩身願望である。まず，賞賛獲得欲求と女性役割受容には高めの相関があり($r<.40$)，これらは「女性としての魅力をアピールしたい」という自己顕示性としてまとめることができるように思われる。こうした顕示性の高さにBMIが高い（今の自分は太っている）という要因が加わる時，痩身が顕示性を満足させるための手段としての意味が強まり，「痩せれば今より良いことがある」といった痩身によるメリット感が高まって痩身願望に結びつくと考えられる。第3は自己不全感から発する痩身願望である。自尊感情が低く日常的な空虚感が高い個人に，BMIが高いという要因が加わった時，そうした自己不全感の原因を自分の太っている身体に帰属し，「今の体型のせいで幸せになれない」といったデメリット感を生じさせる。そして，このデメリット感から痩身のメリット感が生じ，痩身願望に至るという経路である。

上記の構造を端的に表現すれば，痩身願望は，「女性性の保持」「魅力のアピール」「自己不全感からの脱却」といった女子青年たちの多様な欲求を，「痩身」というひとつの単純な手段を用いて満たそうとすることによって高まると言える。そもそも，痩せた身体を尊ぶ社会風潮はどのように形成され，また，どのように維持されてきたのだろうか。こうした，“痩身神話”とでも表現できるような身体観は，小学生の段階において既に存在することも示唆されており（馬場・山本・小泉・菅原, 1998），マスメディアだけでなく，親子関係や友人関係などの影響も含め検討すべき社会心理学的課題である。

一方，臨床心理学的視点から考えたとき，まず興味深いのは，摂食障害，特に神経性無食欲症（Anorexia Nervosa, 以下AN）との関連である。DSM－IV(American Psychiatric Association, 1994)によればANの診断基準としては，極端なやせ状態や無月経以外に，体重が増えることに対する強い恐怖感，自己評価に対する体重や体型の過剰な影響などが重視される。また，神経性大食症（Bulimia Nervosa）の場合にも，むちゃ食いの繰り返しだけでなく，体重の増加を防ぐための代償行為(自

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

己誘発性嘔吐，下剤，絶食，過剰な運動）を繰り返すことや，自己評価が体型や体重によって過剰に影響されることが診断の主要な条件となっており，こうした点から痩身願望が，摂食障害の中核的な特徴の1つであることは明らかである。また，摂食障害の発生過程においてダイエット行動は無視することが出来ない要因とされているが（Fairburn & Cooper, 1984；Szmukler & Patton, 1995；Hsu, 1997；Halmi, 1995），本研究の結果と照らし合わせると矛盾する点も認められる。先の図式(FIGURE 1)では，BMIが低下すれば痩身願望も低下してゆくはずであるが，患者たちの多くは激しく痩せているにもかかわらず強い痩身願望を保持したままである。従って，ANに関してはこのモデルにない特殊な要因が痩身願望を高めている可能性が指摘でき，そうした点で，ANは一般女性の痩身願望やダイエットと不連続の現象とも言える。いずれにせよ，痩身願望と摂食障害の関連については，医学的，生理学的要因なども含めて，さらに検討を深めていく必要があろう。

引用文献

秋本雅代・諸橋泰樹　1987　女性雑誌の「痩せたい広告」の現在―痩身・整形広告の内容と問題点　出版ニュース, 8―11.

American Psychiatric Association　1994　Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders, Forth Edition, Washington, DC, APA　高橋三郎・大野　裕・染谷俊夫訳　1996　DSM―IV精神障害の分類と診断の手引き　医学書院　Pp.205―207.

馬場安希・山本真規子・小泉智恵・菅原ますみ　1998　家族関係と子供の発達(7/7)―小学生の痩身願望の検討―　日本心理学会第62回大会論文集

馬場謙一・村山久美子　1987　神経性食思不振症の身体像―健常青年期女子並びに精神分裂病者との比較―　群馬大学教育学部紀要　人文・社会科学編, **36**, 333―347.

馬場謙一・遠山尚孝　1991　病態心理の側面から　末松弘行・河野友信・玉井　一・馬場謙一編　神経性過食症―その病態と治療　医学書院　Pp.30―45.

Fairburn, C.G., & Cooper, P.　1984　The clinical features of bulimia nervosa.　*British Journal of Psychiatry*.　**144**, 238―246.

Garner, D.M., & Garfinkel, P.E.　1980　Socio-cultural factors in the development of anorexia nnervosa.　*Psychological Medicine*, **10**, 647―656.

Halmi, K.A.　1995　Current concepts and definitions.　Szumukler, G., Dare, C., & Treasure, J. eds.　Handbook of Eating Disorders : Theory, Treatment and Research.　John Wiley & Sons Ltd.　Pp29―42.

広井正彦　1997　わが国思春期少女の体格，月経周期，体重変動，希望体重との相互関連について―アンケートによる―　日本産科婦人科学会雑誌, **49**, 367―377.

Hsu, L.K.G　1997　The aetiology of anorexia nervosa.　*Psychological Medicine*, **13**, 231―238.

生野照子　1993　摂食障害の動向　心の健康, **8**, 39―45.

今田純雄　1993　食行動に関する心理学的研究(3)：日本語版DEBQ質問紙の標準化　広島修大論集, **34**, 281―291.

伊藤裕子　1978　性役割の評価に関する研究　教育心理学研究, **26**, 1―10.

柏木恵子　1972　青年期における性役割の認知(II)　教育心理学研究, **20**, 48―59.

Kendler, K.S., MacLean, C., Neale, M., Kessler, R., Heath, A., & Eaves, L.　1991　The genetic epidemiology of bulimia nervosa.　*American Journal of Psychiatry*, **148**, 1627―1637.

北川淑子　1989　女子学生・生徒の食生活と体重の実態　心身医学, **29**, 302―307.

切池信夫・永田利彦・白田久美子　1996　近年における若い女性のBody Mass Index低下について　臨床精神医学, **25**, 611―617.

諸橋泰樹　1994　女性雑誌に見る“痩せ”ブームを探る　松井　豊編　ファンとブームの社会心理　サイエンス社　Pp.115―140.

鍋田恭孝・菅原健介・宮岡　等・佐久間啓　1984「自己意識」から見た神経症とその周辺―各疾患の自己意識の特徴について―　精神医学, **28**, 379―386.

Patton, G.C., Johnson-Sabine, E., Wood, K., Mann, A.H., & Wakeling, A.　1990　Abnormal eating attitudes in London schoolgirls-a prospective epidemiological study : outcome at twelve month follow-up.　*Psychological Medicine*, **20**, 383―394.

Rosenberg, M.　1965　Society and the adolescent

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

self-image. Princeton Univ. Press.

Shisslak, C.M., & Cargo, M. 1987 Primary prevention of eating disorders. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **55**, 660—667.

下坂幸三 1988 アノレクシア・ネルヴォーザ論考 金剛出版

志村 翠・堀江はるみ・熊野宏昭・久保木富房・末松弘行・坂野雄二 1994 日本語版Eating Disorder Inventory-91の因子構造について 行動療法研究, **20**, 8—15.

菅原健介 1984 自意識尺度日本語版作成の試み 心理学研究, **55**, 184—188.

菅原健介 1986 賞賛されたい欲求と拒否されたくない欲求—公的自意識の強い人に見られる2つの欲求について— 心理学研究, **57**, 139—140.

菅原健介・馬場安希 1998 現代青年の痩身願望についての研究—男性と女性の痩身願望の違い— 日本心理学会第62回大会発表論文集

Szmukler, G.I., & Patton, G. 1995 Sociocultural models of eating disorder. Szumukler, G., Dare, C., & Treasure, J. eds. Handbook of Eating Disorders : Theory, Treatment and Research. John Wiley & Sons Ltd. Pp.177—192.

矢崎葉子 1992 誰がダイエットをはじめたか 大田出版

山本真理子・松井 豊・山成由紀子 1982 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, **30**, 64—68.

山本真理子・菅原健介・井上カーレン果子・上瀬由美子・宮本聡介 1997 現代の若い母親たち—父, 子供, 生活, 仕事— 新曜社

Welch, G., Hall, A., & Walkey, F. 1988 The factor structure of the eating disorders inventory. *Journal of Clinical Psychology*, **44**, 51—55.

White, M.B., & White, W.C. 1978 Bulimarexia The binge/purge cycle 杵渕幸子・森川那智子・細田真司・久田みさ子訳 1991 過食と女性の心理—ブリマレキシアは現代の女性を理解するキーワード 星和書店

(1998.9.21受稿, 2000.3.3受理)

Drive for Thinness in Adolescent Women

Aki Baba (Department of Psychiatric Rehabilitation, National Institute of Mental Health, National Center of Neurology and Psychiatry) and Kensuke Sugawara (Seishin University) *Japanese Journal of Educational Psychology, 2000, 48, 267—274*

The purposes of the present study were to construct a Drive for Thinness (DFT) Scale, and to examine the effects of psychological factors on the drive for thinness. In the present study, "drive for thinness" was a defined as a psychological desire to lose weight and a motive for dieting. 500 adolescent women responded on the Drive for Thinness Scale and another questionnaire. The reliability and validity of the Drive for Thinness Scale were verified. The results showed that drive for thinness was positively correlated with a sense of gain and loss in one's own body, being praised, and sex-role acceptance, and negatively correlated with self-esteem and feelings of stress. These psychological factors influenced the drive for thinness via the sense of merit about losing weight. Three channels that heighten women's drive for thinness were discussed.

Key Words : drive for thinness (DFT), sense of gain and loss in own body, self-manifestation, self-incompleteness, eating disorder

NII-Electronic Library Service